

大学生は教員を「先生」と呼ぶか ー山梨大学の日本語母語話者学生を対象としたアンケート調査からー

王 筱・江 崎 哲 也

要 旨

本研究では、日本語を母語とする大学生が、教員を「先生」と呼ぶ要因を解明するため、一対一で話す場面を設定し、「調査協力者の属性（性別、年齢、専攻）」、「力関係（年上 / 同年齢）」、「相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員であるかどうか、性別）」、「親疎関係（親しい：プライベートの付き合いがある友達・親しくない：友達ではない）」、「教授されたか否か、またその内容（学問的 / 実用的）」の五つの要因を質問事項に入れ、日本語を母語とする大学生及び大学院生を対象にアンケート調査を実施した。決定木分析を用いて分析を試みた結果、「先生」という呼称選択を決定づける主な要因は「力関係（年上・同年齢者）」であることがわかった。また、「相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員であること）」と「教えられた内容（学問的・実用的）」も要因となることが示唆された。一方、所属する大学の教員であることを知っていても、「先生」と呼ばない学生が少数いることもわかった。

キーワード：呼称選択、大学教員、先生、属性、決定木分析

1. はじめに

『日本国語大辞典 第二版 第八巻』（小学館）は、「先生」を以下のように説明している。

- ①先に生まれた人。年長者。
- ②学芸に長じた人。学者。
- ③医師など、その道の専門家、指導的立場の者などを敬っていう語。
- ④師として教える人。現代では、特に教育にたずさわる人、学校教員をいう。また、自分が指導を受けている、あるいは受けた師。教師。師匠。
- ⑤からかうような気持ちで、他人をあなどっている語。
- ⑥（代名詞的に、接尾語として）相手とする師や、教員、医師、議員などを尊敬して呼ぶ語。かなり高い敬意を有するが、江戸時代には、狂歌師、幫間、しっかい屋などの通人、もしくは遊里関係にも用いられた。時に⑤のように、からかい気分で用いることがある。

以上のように、現代日本社会における「先生」という呼称は様々な意味を持ち、異なる場面で用いられるが、本稿は上記④及び⑥を研究対象とする。

大学教員の呼称選択については、林ら（2014）が大学教員間の「さん」と「先生」の呼称選択に影響する諸要因について研究を行い、その結果、教員同士の「先生」と「さん」の使用選択については、対話場面の影響が最も強く、「親疎関係（親しい・親しくない）」、「力関係（年上・同年齢・年下）」、「調査協力者の男女差・年齢」の違いが、部分的に認められたと報告している。しかし

ながら、日本語母語話者の大学生が教員をどのように呼ぶかについての研究は、管見の限り存在しない。また筆者らの経験では、大学教員を「先生」と呼ばない学生がいることが確認されている¹。そこで、本研究では、日本語を母語とする大学生が「先生」という呼称をどのような場合に選択するか、そして一対一で話すときの呼称選択に影響を与える要因について検討を試みる。

以下では、まず、調査方法と分析方法について述べる。次に、アンケート調査の結果について説明する。最後に、決定木分析を試み、呼称選択に影響を与える要因を検討する。

2. 研究方法

2.1 調査時期と協力者

2017年5月22日から6月15日まで山梨大学の学部生・大学院生を対象として「先生」という呼称に関するアンケート調査²をweb上で行った。調査協力者79名のうち、回答に不備のある9名の回答と7名の信頼できない回答（アンケートの前部と後部に一回ずつ出題した同じ質問に対する回答が異なったもの）を集計から排除し、63名分を有効回答者として分析した。63名の回答者の内訳を図1-1、1-2、1-3に示す。

¹ ゼミによっては「同じ研究者として平等なのだから、指導教員を『先生』と呼ばず、『〇〇さん』と呼ぶように」と学生に呼称の指導することもあると聞く。しかし、そのような指導を受けていないと考えられる学部1～2年生が、教員を「〇〇さん」と呼ぶ場面を筆者らは複数回観察する。

² <https://goo.gl/forms/lMyXkBQMFHHRDFE43> のアンケートのコピーを参照のこと。

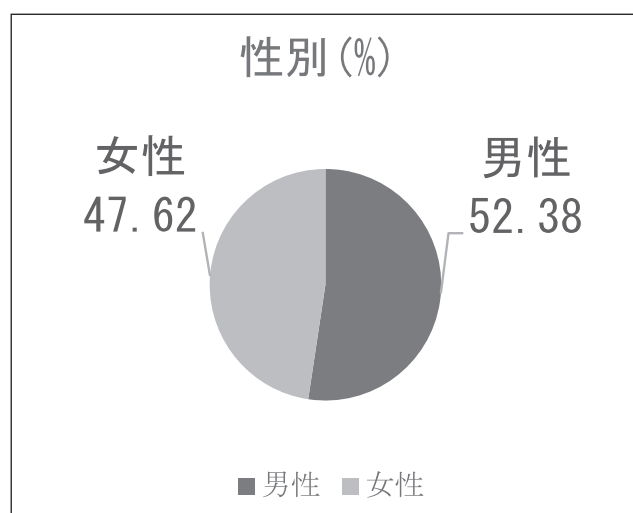


図1-1 調査協力者の性別

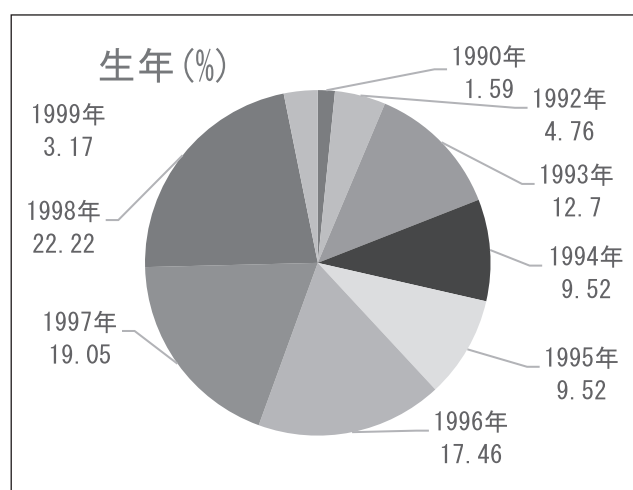


図1-2 調査協力者の生まれた年

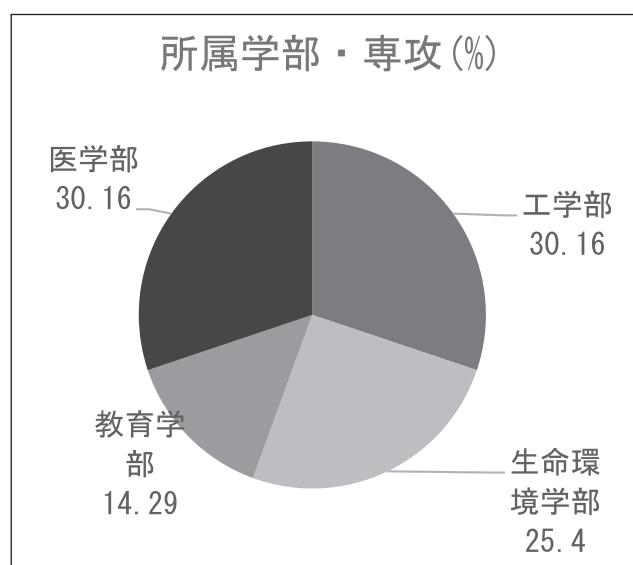


図1-3 調査協力者が所属する学部・専攻

2.2 質問内容（場面、意図）と信頼できる協力者の検証

日本語を母語とする大学生の「先生」という呼称選択に与える要因を解明するため、一対一で話す場面を設定し、「調査協力者の属性（性別、年齢、専攻）」、「力関係（年上 / 同年齢）」、「相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員であるかどうか、性別）」、「親疎関係（親しい：プライベートの付き合いがある友達・親しくない：友達ではない）」、「教授されたか否か、またその内容（学問的 / 実用的）」の五つの要因を説明変数とし、質問項目に入れた。呼称表現は、「先生または〇〇先生」、「〇〇さん」、「呼び捨てにする（「先生」、「〇〇先生」、「〇〇さん」と呼ばないようにする）」を選択肢にあげた。また、「その他」という自由記入欄も設けた。

（アンケートの内容は <https://goo.gl/forms/lMyXkBQMFHHRdfe43> を参照のこと。）

2.3 分析方法

「R言語（R x64 3.4.1）」で「決定木分析」を用いて説明変数の検証を行った。図2に示す通り、「相手のことを『先生』と呼ぶ」を目的変数とし、「調査協力者の属性（性別、年齢、専攻）」、「力関係（年上 / 同年齢）」、「相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員であるかどうか、性別）」、「親疎関係（親しい：プライベートの付き合いがある友達・親しくない：友達ではない）」、「教授されたか否か、またその内容（学問的 / 実用的）」の5つを説明変数とする。

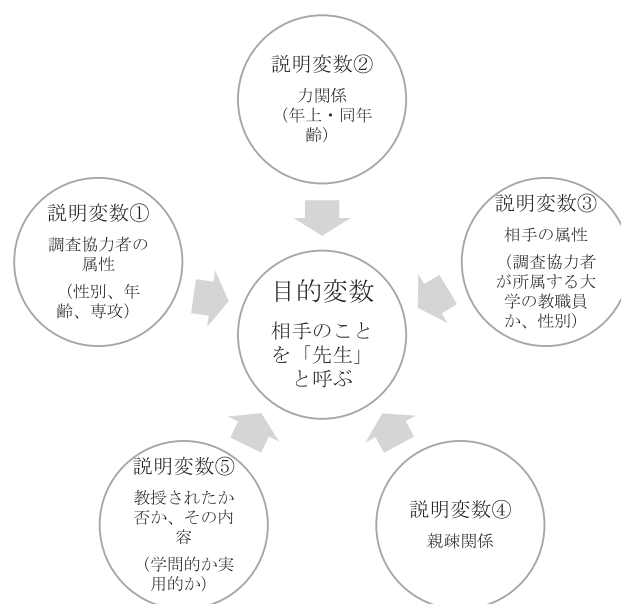


図2 本研究における決定木分析の目的変数及び説明変数

3. 結果

すべての回答をまとめて決定木分析したところ、説明変数③の「相手の属性」のうち「調査協力者が所属する大学の教員であるかどうか」でほぼ説明できるという結

果になった。つまり、学生が所属する大学の教員であれば「先生」と呼ぶということになる。しかし、本稿では一対一で話す場面でどのような呼称を選択しているか、

またその選択の要因を探るために、実際の学生の言語生活において起こりうる場面ごとに分析を試みる。

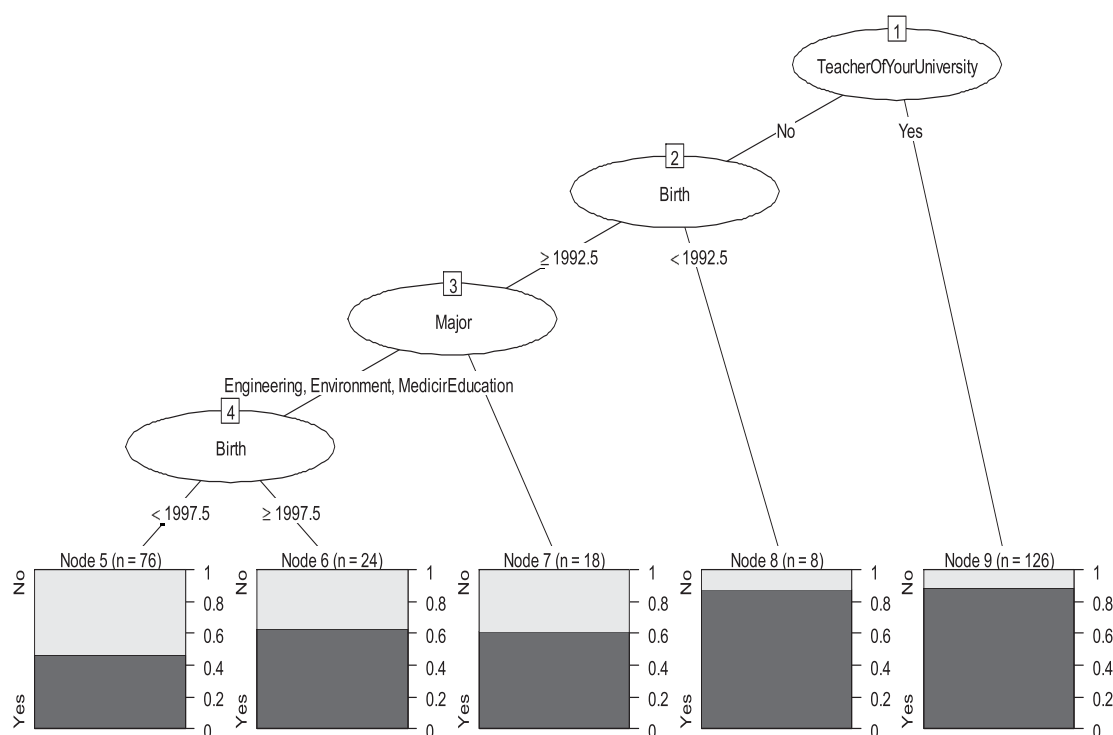


図3 相手が教員であることがわかっている場合³

3.1. 相手が教員であることがわかっている場合の呼称選択に影響する要因

相手が大学教員であることがわかっている（所属大学の教員かそうでないかを問わず「大学の教員」であることがわかっている）場合について見てみる。この決定木分析（図3）の結果から、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主な要因は相手が調査協力者の所属する大学の教員であるか否かであることがわかる。相手が調査協力者の所属する大学の教員であると、「先生」と呼ぶ傾向が非常に強い。また、相手が調査協力者の所属する大学の教員でなくても、調査協力者が25歳以上（大学院生）である場合、教員の呼称として「先生」を選択する比率が80%を超えた。さらに、相手が調査協力者の所属する大学の教員ではなく、調査協力者が25歳以下である場合、教育学部⁴所属の調査協力者は相手のことを「先生」と呼ぶ傾向が他の学部出身の人より強いことがわかる。これは教育学部の学生が他の学部の学生よりも「先生」を選択することを示しているが、本学の教育学部がいわゆる教員養成系の学部であることと無関係ではないだろう。

つまり、この決定木から、相手が大学教員である場合、説明変数③の相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員であること）が相手のことを「先生」と呼ぶことに最も強い影響を与えたことが読み取れ、次に説明変数①の調査協力者の属性が影響していることがうかがえる。

3.2. 相手が所属する大学の教員であることがわかっている場合の呼称選択に影響する要因

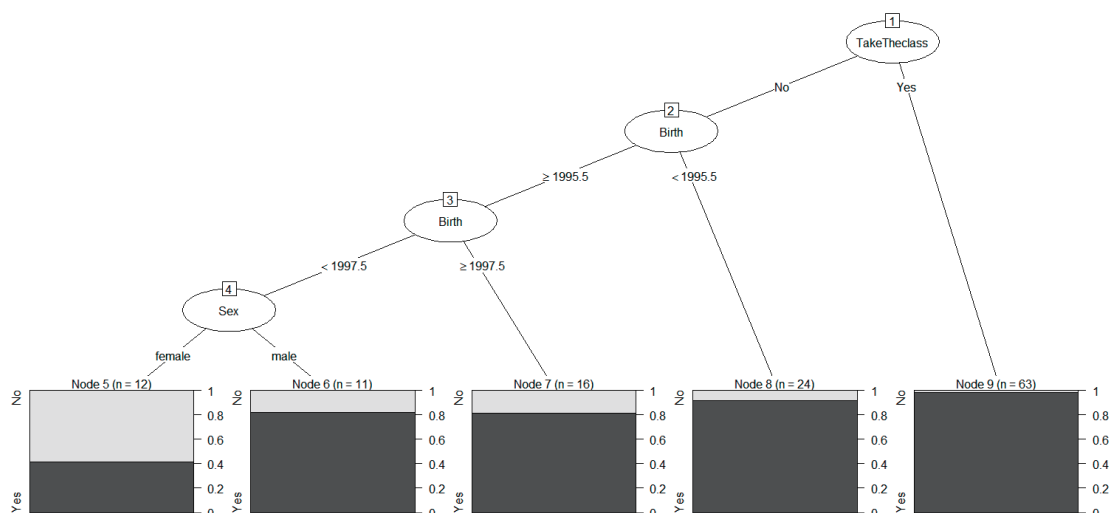
ここでは、相手が自分の所属する大学の教員であることがわかっている場合について検討する。この決定木分析（図4）の結果から、相手が調査協力者の所属する大学の教員である場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主な要因は、相手の授業を受けたことがあることであることがわかる。また、調査協力者が22歳以上である場合、相手の授業を受けたことがなくても、相手を「先生」と呼ぶ比率は90%を超えた。その一方で、調査協力者が20歳以下の場合、授業を受けたことがない相手のことを「先生」と呼ぶ比率が、調査協力者が22歳以上である場合より約10ポイント低かった。また、調査協力者が20歳以上22歳以下（大学3年生、4

³ TeacherOfYourUniversity：調査協力者が所属する大学の教員であること。

Birth：調査協力者の生まれた年。

Major：調査協力者の学部・専攻。

⁴ 調査時においては、「教育人間科学部」所属の学生も存在したが、本稿では「教育学部」所属としている。

図4 相手が自分の所属する大学の教員であることがわかっている場合⁵

年生) の場合、授業を受けたことがない相手のことを「先生」と呼ぶ男性は80%を超えた一方、女性は50%に満たなかった。このように、相手が調査協力者の所属する大学の教員である場合、説明変数⑤の「教授されたか否

か、またその内容」が相手を「先生」と呼ぶことに最も強い影響を与えたことが読み取れる。

なお、説明変数①の「調査協力者の属性」のうち、年齢・性別も呼称選択に影響する要因の一部であると考えられる。

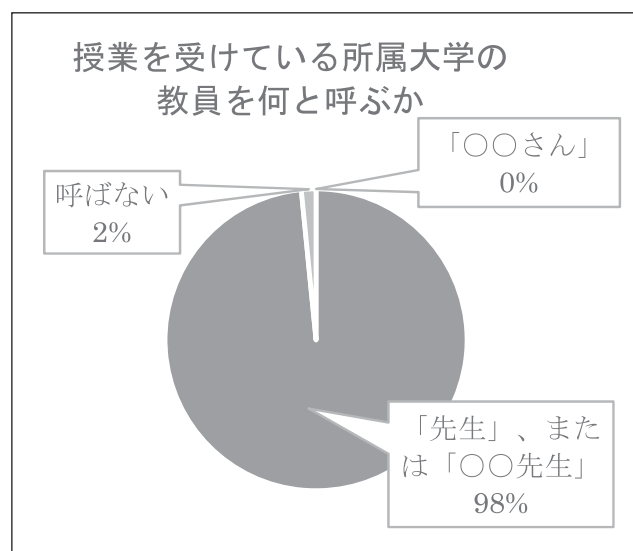


図5-1 授業を受けている所属大学教員の呼称

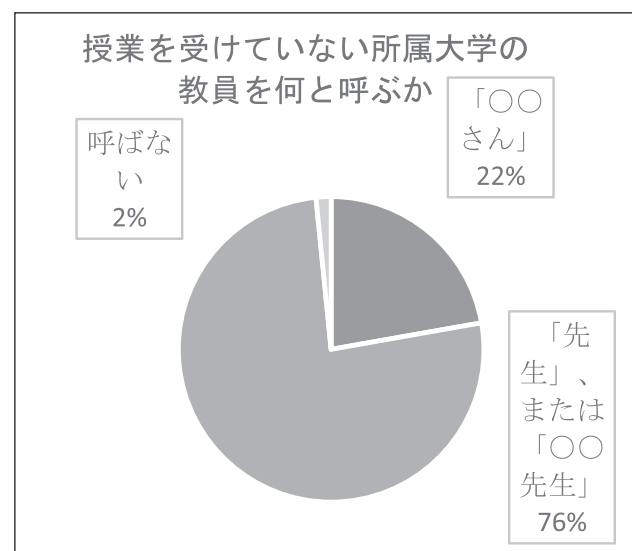


図5-2 授業を受けていない所属大学教員の呼称

一方で、所属大学の教員であっても、その教員の授業を受けているか否かによって呼称を使い分けている学生が22%いた(図5-2)。授業を受けていれば「先生」と呼ぶ学生が圧倒的に多い(図5-1)が、授業を受けていなければ、自分が所属する大学の教員であっても「〇〇さん」と呼ぶ学生が2割もいるのである。この使い分けをしている一人の調査協力者にフォローアップインタビューを行ったところ、「自分の所属する学部の教員で

なければ『先生』と呼ぶ必要はない。」と考えていることがわかった。この調査協力者はさらに複雑に使い分けをしており、「自分の所属する学部の教員でなくても『先生』と呼ぶこともあるが、それはその教員が先生として皆の前に立って説明した姿を見て、その人が先生だという実感が持てたからである。」と語っていた。このように、自身が所属する大学の教員に対して一様に「先生」と呼ぶのではなく、授業を受けているか否かによって呼称を

⁵ TakeTheclass：相手の授業を受けたことがあること。

Birth：調査協力者の生まれた年。

Sex：調査協力者の性別。

使い分けている学生が一定数いること、また授業を受けていない教員に対しても「先生らしい立ち居振る舞い」を見たか否かによって呼称を選択している可能性があることが明らかとなった。

3. 3. 相手が教員、または職員であることがわかっている場合の呼称選択に影響する要因

この決定木分析（図6）の結果から、相手が教員／職員である場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定

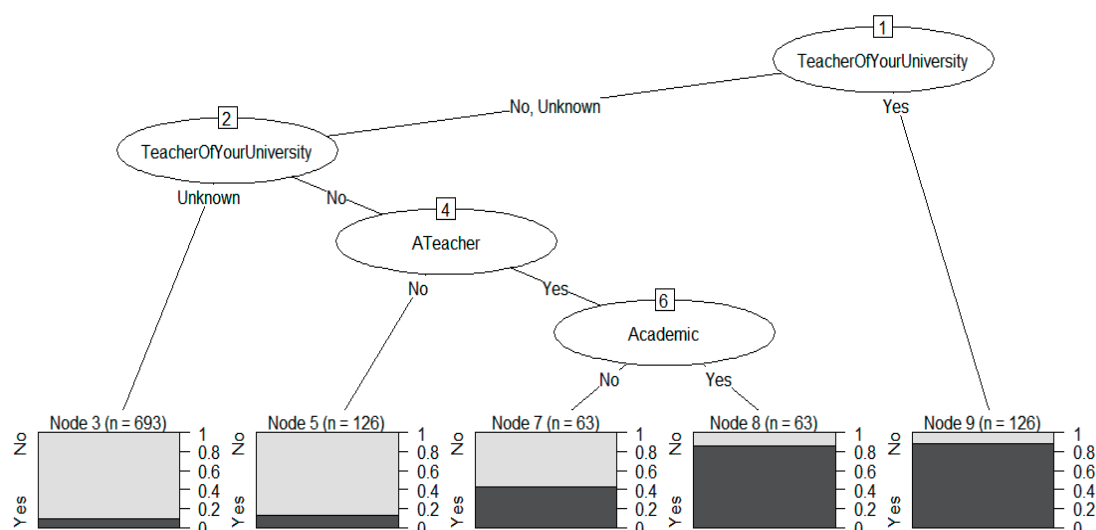


図6 相手が教員/職員であることがわかっている場合⁶

づける主な要因は、相手が調査協力者の所属する大学の教員であることがわかる。相手が調査協力者の所属する大学の教員である場合、「先生」と呼ばれる傾向が最も強い。

次に、相手が調査協力者の所属する大学の教員ではなく他の大学の教員で、学問的なことを教えてもらったことがある場合、相手に対する呼称として「先生」を選択する比率が80%を超えた。ただし、学問的なことを教えられたことがない場合、相手のことを「先生」と呼ぶ人は50%に満たなかった。

また、相手が教員でない場合であっても、相手のことを先生と呼ぶ人が10%を超えた。相手が自分の所属する大学で働いているが、具体的な職種が分からない場合

に、約10%の調査協力者が相手のことを「先生」と呼ぶことがわかった。

上記のように、この決定木から、相手が大学教員である場合、説明変数③の「相手の属性」のうち、調査協力者が所属する大学の教員であることが相手のことを「先生」と呼ぶことに最も強い影響を与えることが読み取れる。また、他大学の教員であっても、説明変数⑤の「教授されたか否か、またその内容」が影響していることがわかる。

3. 4. 相手が所属する大学の教員、または職員であることがわかっている場合の呼称選択に影響する要因

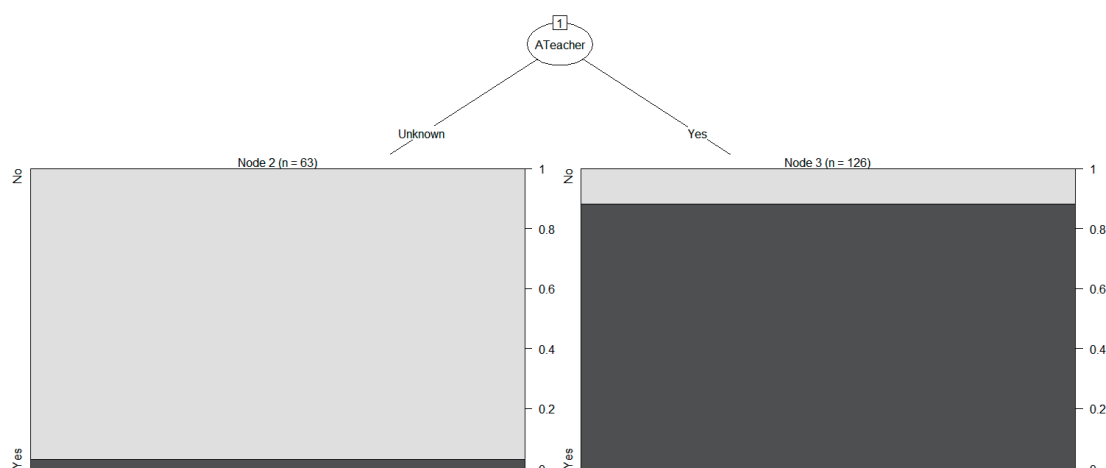


図7 相手が自分の所属する大学の教員/職員である場合⁷

⁶ TeacherOfYourUniversity：相手は調査協力者が所属する大学の教員であること。

ATeacher：相手が教員であること。

Academic：相手から学問的なことを教えてもらったことがあること。

⁷ ATeacher：相手が教員であること。

この決定木分析（図7）の結果から、相手が調査協力者の所属する大学の教員／職員である場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主な要因は、相手の属性（教員である）であることがわかる。調査協力者の所属する大学の教員／職員であることを知っているが、

教員であるか職員であるかがわからない場合、相手のことを「先生」と呼ぶ人は10%に満たない。

3. 5. 相手が大学教育関係者ではない場合の呼称選択に影響する要因

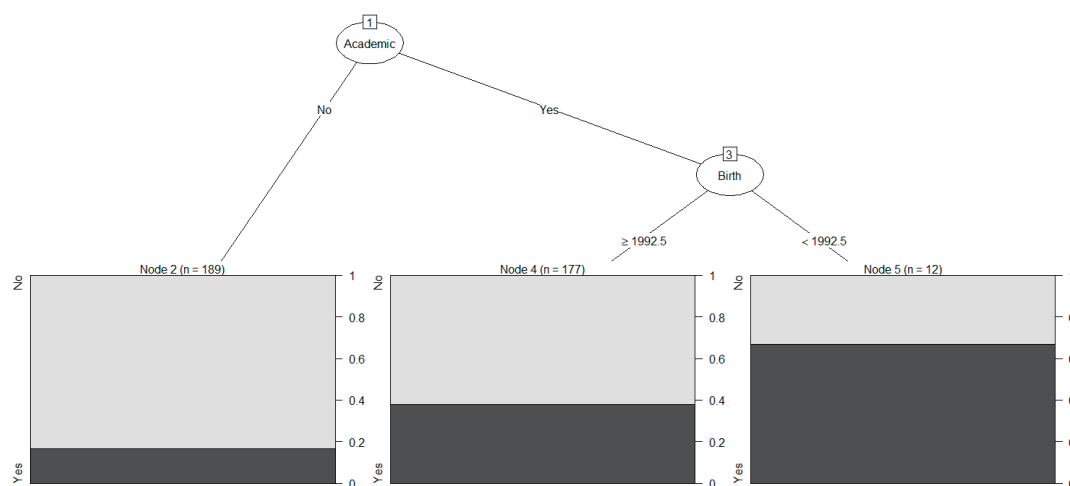


図8 相手が大学教育関係者ではない場合⁸

ここでは相手が大学教育関係者ではない場合に、どのような変数が影響を与えているかを検討する。この決定木分析（図8）の結果から、相手が大学教育関係者ではない場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主な要因は、教えられた内容であることがわかる。しかし、相手から学問的なことを教えてもらったことがあっても、25歳以上の調査協力者の60%超が「先生」を選択するのに対し、25歳未満の調査協力者で「先生」を選択する学生は40%に満たない。このことから、説明変数⑤の「教授された内容（学問的／実用的）」が主

要因となり、説明変数①の「調査協力者の属性」のうち年齢も影響を与えていることがわかる。

3. 6. 相手が大学教育関係者ではない場合の呼称選択に影響する要因

この節では、以下のように社会人になった時のことを想像して、同年齢の友人／知人の呼称について学生がどのように回答したかについて述べる。

あなたが社会人になってからできた同い年の仲が良い男性の友達（プライベートの付き合いがある人）のことを想像してください。その人があなたと知り合う前から教員をしている場合、1対1で話をするとき、その人のことをどう呼びますか？

☐ 「先生」、または「〇〇先生」

☐ 「〇〇さん」

☐ 呼び捨てにする（「先生」、「〇〇先生」、「〇〇さん」と呼ばないようにする）

☐ その他： _____

この決定木分析（図9）の結果から、相手が調査協力者と同じ年である場合、知り合う前から教員として働いており、且つ疎の関係にあることが相手に対する呼称として「先生」を選択する主たる要因になることがわかる。さらに教育学部の学生が（社会人になった時に）、ある人と知り合う前から教員として働いている疎の関係にある相手を「先生」と呼ぶ可能性が高く、50%を超えた。

他の学部 of 学生が同じ相手を「先生」と呼ぶ傾向は比較的低く、20%に満たない。このことは先行研究でも指摘されていた説明変数④の「親疎関係」が呼称に影響することとも合致する。教育学部の学生が以前から教員をしていた同年の知り合いを「先生」と呼ぶ可能性が高いのは、調査協力者が自身の職業を「教員」と設定して回答した可能性も考えられる。

⁸ Academic：相手から学問的なことを教えられたことがあること。
Birth：調査協力者の生まれた年。

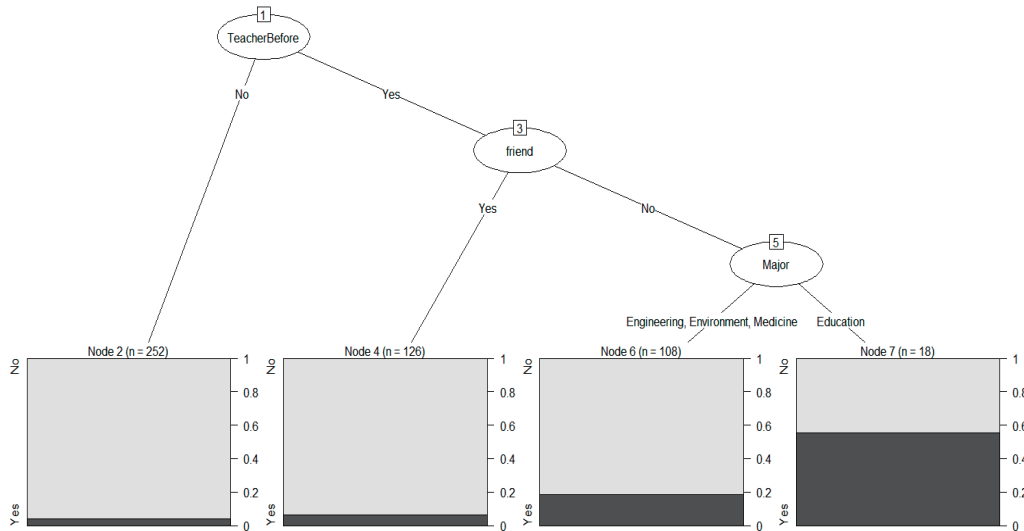


図9 相手が自分と同じ年である場合⁹

4. まとめと今後の課題

本稿では、日本語母語話者の大学生が教員と一対一で話す場合に呼称として「先生」を選択するか否か、また「先生」を選択する要因について考察した。その結果、以下のことがわかった。

1) 相手が教員または職員である場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主要因は、説明変数③の「相手の属性（調査協力者が所属する大学の教員である）」であるが、説明変数①の「調査協力者の属性（年齢25歳以上、教育学専攻）」も少なからず影響している。

2) 相手が調査協力者が所属する大学の教員であることがわかっている場合は、「相手の授業を受けたことがある」場合は「先生/〇〇先生」を、ない場合は「〇〇さん」を選択している学生が一定数存在する。

3) 相手が調査協力者が所属する大学の教員であることがわかっている場合は、授業を受けたことがあれば、「先生」を選択する確率が非常に高いが、授業を受けたことがなくても調査協力者の属性が20歳以上、男性であれば「先生」を選択する傾向にある。

4) 相手が教育関係者ではない場合、「学問的なことを教えてくれたことがある」ということが、「先生」と呼ぶことに最も強い影響を与える要因である。

5) 相手が調査協力者と同じ年である場合、相手のことを「先生」と呼ぶことを決定づける主要因は、相手が知り合う前からずっと教員として働いていて、プライベートな付き合いがないことである。

以上のように、日本語母語話者の大学生が「先生」という呼称を選択する際に影響を与える主要因が明らか

になった。しかしながら、回答者がどのような相手を想像しながら答えたか詳細はわからず、アンケート調査の限界を感じた。特に、大学の教員であり、医師としても働いている医学部の教員に対する呼称選択が検討できなかった¹⁰。それを解明するには、アンケート調査の質問事項に医師に関する項目の設定も必要になるだろう。医学部の教員への呼称選択について医学部生と他の大学生の意識、及び影響を与える要因をさらに詳細に調べていくことが今後の課題である。

参考文献

- [1] 北原保雄. 日本国語大辞典 第二版. 2001, 第八巻
- [2] 林炫情, 玉置賀津雄, 宮岡弥生. 大学教員間の「先生」と「さん」の呼称選択に影響する諸要因, 山口県立大学学術報. 2014, p. 7-15.
- [3] 玉岡賀津雄. 「決定木」分析によるコーパス研究の可能性: 副詞と共起する接続助詞「から」「ので」「のに」の文中・文末表現を例に. 自然言語処理. 2006, 13 (2), p. 169-179.
- [4] 馬瑩石. 日本学校中的師生称呼. 日語知識. 2006, 01

謝辞

本調査にご協力くださった皆様、調査進行にご協力くださった山梨大学国際交流センター・国際企画課の方々に心から感謝の意を表したい。また、本稿の執筆に際し、細入まゆき氏及び金丸榛奈氏より細部にわたりご教示を賜った。ただし、残された不備は筆者の責に帰するものである。

⁹ TeacherBefore: 相手が調査協力者と知り合う前からずっと教員として働いていること。 (「TeacherSinceBefore」の文字数が多いため、この決定木で文字数が少ない「TeacherBefore」で「相手が知り合う前からずっと教員として働いていること」の意味を表す)。

friend: 相手が調査協力者のプライベートの付き合いがある友達であること。

Major: 調査協力者の学部・専攻。

¹⁰ 本学は2つのキャンパスに分かれている。甲府キャンパスには教育学部、工学部、生命環境学部が、医学部キャンパスには医学部がある。両キャンパスは10kmほど離れており、甲府キャンパスにある3学部の学生は医学部の教職員と接する機会はほぼ皆無であるが、医学部の学生は1年次に甲府キャンパスで一般教養科目を履修するため、両キャンパスの教職員と接している。